

『夷堅志』編纂と諸版本の研究

潘, 超

<https://doi.org/10.15017/1931672>

出版情報：九州大学, 2017, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

氏名	潘超			
論文名	『夷堅志』編纂と諸版本の研究			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	東英寿
	副査	九州大学	准教授	秋吉 収
	副査	九州大学	准教授	長谷千代子
	副査	九州大学大学院言語文化研究院	教授	中里見 敬
	副査	京都府立大学	教授	小松 謙

論文審査の結果の要旨

中国の南宋時代（1127～1279）、印刷術の発展により、従来殆ど印刷の対象とされてこなかった志怪小説・奇譚集が刊行されるようになった。その中で最も注目されるのは、今日「民間故事集の魁」と称される洪邁撰『夷堅志』三十二志、全四百二十巻の刊行である。『夷堅志』三十二志は、一時期に完成したものではなく、作者・洪邁の八十年の生涯をかけて、逐次編纂出版された。そのため、成書の時期が異なり、出版地点も各地に広がり、しかも四百巻を超える浩瀚な書物であったので、宋代において『夷堅志』全巻が一括して上梓されたことはなかった。つづく元代には、早くも『夷堅志』の一部が散佚し、その後の伝承過程においてもしばしば散佚し、結局、今日にはおよそ半分しか伝わっていない。このような資料的制約があるため、『夷堅志』編纂についての詳細な考察や『夷堅志』諸本の伝承状況について考察しがたく、従来は洪邁の執筆動機と成書時期に焦点を当てた研究が中心であった。本論文では、先行研究において明らかでなかった『夷堅志』編纂についての考察を上篇で、『夷堅志』の諸版本についての考察を下篇で行った。本論文は、序論、上第二章、下篇三章、結論という構成である。

本論文の序論において、問題点の提出、先行研究のまとめを行った上で、上篇「『夷堅志』の編纂」の第一章においては、まず洪邁の生涯と『夷堅志』編纂の方法、及び南宋時代の出版文化について考察した。さらに『夷堅志』収録の逸話を洪邁に提供した人士に着目して、木版印刷が急速に発展した当時の環境や、従来の小説集出版には見られない様々な現象を明らかにした。第二章では、『夷堅志』三十二志のうち、特に『夷堅志乙志』に着目して考察した。『夷堅志乙志』の現存刊本は全て南宋乾道八年（1172）の建安本系統の刊本であるが、この刊本は洪邁が読者の批判を免れるために、『夷堅志乙志』原刻本の一部に、改編・削除を加えたうえで、新たに編纂して再刊したものであることを明らかにした。さらに、上海図書館所蔵の写本『夷堅志乙志』三巻（残本）を乾道八年刊本と校合すると、この残本はすでに失われた『夷堅志乙志』原刻本系統の写本であることが判明し、改作される前の原刻本のテキストを保存している。この二種類の伝本を詳細に比較検討することで、南宋の出版史における極めて興味深い現象である「改作」という新たな編纂活動の実態を見出すことができた。

下篇「『夷堅志』の諸版本」においては、第三章で静嘉堂文庫所蔵の宋刻元修本について調査し、従来不明確であった、元代に他志から混入された逸話の数と具体的な篇目をそれぞれ明確にした上で、『夷堅志』の現存する前四志のテキストの真の来源、及び補刻来源の「古杭本」とはどういうものであったのかという点について考察した。第四章においては上海図書館所蔵の黄丕烈校本を基礎

資料として、黄丕烈の校語を検討し、これまで未解明であった通行本の底本（後十志）の成立過程について考察するとともに、上海図書館蔵本の性格及びその中に保存される宋刻本と旧鈔本関連の諸情報について整理し明らかにした。第五章においては、『夷堅志』の選本と『夷堅志』を引用した南宋類書の伝承関係、引用来源などを考察して、当時の『夷堅志』各志の出版状況を明らかにした。このように下篇においては、『夷堅志』の現存諸本について文献学的に調査研究し、『夷堅志』の伝承ならびに現存テキストに見られる諸問題を考察した。結論では、上篇二章と下篇三章の考察を踏まえて、『夷堅志』の編纂と諸版本の特徴及びその伝承についてまとめ、『夷堅志』の特色と南宋における『夷堅志』出版の価値について論じた。

以上、本論文は、中国南宋時代の洪邁の『夷堅志』について文献学的方法を用いて考証し、従来明らかでなかった『夷堅志』の編纂状況やその過程と、諸本の実像及び相互の影響関係について明らかにしたものであり、南宋時代の出版文化や今後の『夷堅志』研究に多大な貢献を果たしたと言える。よって、本論文は博士（比較社会文化）の学位を授与するに十分な内容と判断される。